
強面騎士団長と異世界人

ヒスイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

強面騎士団長と異世界人

【Zコード】

N6263V

【作者名】

ヒスイ

【あらすじ】

強面騎士団長とトリップしてきた女性のほのぼのラブ・ラブ生活のんびり進んでいきます。

登場人物メモ

篠宮 優季 シノミヤ・ユウキ

20歳 高身長で男に間違われる

超絶美形。濡れるような黒髪に緑の瞳。

父親に仕込まれたので強い。

グレンさんのギャップに萌える今日この頃。

グレン・マイサス

24歳 2メートルぐらいの大男

赤い髪に水色の瞳。顔は整っているもののそれを帳消しにする怖さがある強面。

初対面の人はほぼ全員顔をそらす。中身は良い人。
自分を怖がらないコウキに好意を寄せる。
純情。顔に表情がない。無表情で無口。
ギャップが激しい。

騎士団長の悩み

大陸最大の国 センテスト王国には騎士団が存在しその騎士団長と言えば誰もが知るほど有名である

【笑う子も泣き大人も逃げ出す】ほどの強面で長身の24歳 独身
グレン・メイサス その人である。
真面目で仕事一筋 実力も十分あるのだが彼には直属の部下がない
いのである。

その原因是全て彼の顔にあった。

なにも顔が引くほど酷い訳ではないむしろ精悍に整っている。
だが顔が怖いのだ。入りたての新人は彼の視線を受けて一回は皆気
絶する程に。

彼の部下になると言つ事は同じ部屋で仕事をすると言つことであり、
壯絶な強面男と長い時間一緒に
いると言つことにもなる。なので皆志願しないのだ。

以前副団長のヒューイが無理矢理つけさせた者がいたが一日後には
泣きながら退職届けをだしたのだった

その事があつてからもうグレンは諦めたのだった。俺はそんな
に怖いのか と

グレン自身は何も見た目通りの人間ではない。

昔から顔が怖いとずっと人から避けられ続けた彼だが彼は性格はひ
ん曲がってはいなかつた。

副団長の方がずっとひん曲がつている。

だからこそ彼は悲しく思うのだ。

盗賊が出たと言つ報告があれば退治しに行って盗賊と村人に間違えられ

怪我をした子供を助けようとしたら泣きながら逃げられ

友人達にも「その顔まじ怖え、絶対部下出来ねえわ」と笑いながら言われ

などと言つ事が頻繁に起これば彼だって傷つくのである。

そんな彼が己を怖がらないトリップしてきた女性に会うのは数日後である。

拝啓　お父様お母様へ　異世界へトリップした娘よ

拝啓　お父様　お母様

あなた方の娘として生きてこれた20年　本当に幸せでした。
朝仕事へ出かけた私が帰つて来ないとなればさぞ心配なされておられるのでしょう。

特にお母様は得意の引き籠りを発動されていることでしょう。
お父様、お母様をなんとか慰めて引きずり出してくださいね。
私はあなた方の娘です。どんな状況でも最後まで諦めず生きていきたいと思います。

大丈夫です。お父様とお母様の血を引いている私にはゴキブリ並みの生命力があるでしょう。
そして叶つのならば再びお父様とお母様に会いたいです。

ですがこれだけ言わせてください。

「どーしてこうなった」

心へ戻りうつむいた

「……………」

ポツリと私は心中で両親に対する手紙を読んだ後呟いた。

私 篠宮 優季 は朝まで普通の日常を歩んでいたはずなのに。
朝の事を振り返りながら思つ。

朝、仕事場へと向かつ途中の事だつた。今日は空が青くて良い日だ、
何て思いながら空を見ながら
歩いていたのがいけなかつたのだろうか。

それは突然の事だつた。右足を踏み出した所に本来あるべき道が無
かつたのだ。

そのまま当然ながら私は落ちた。

そして今に至る。

今私は森だと思われる場所にいる。

落ちてきた時に気絶でもしたのだろうか？気がついたら此処にいた。

……………するよ 私……………

大した怪我は無いようなので一安心なのだけど、そのまま此処にい
たら死ぬんじゃない？私

森には野性の動物がいるだろ？……………少しはなんとか出来るけど・

・

…………暗くなつてはいけない！

私はあの両親から産まれたのだから、きっと何処でも生きていける！いや、生きていこう！

「まずは・・森から出たいけど、何処から出れるかわからないいや・・」

父に教えられた事を思い出す。

「もしもの時は冷静に、落ち着いて行動するのが大事な事だよ」

それが父に幼い時に教わった言葉だ。

父は絶世の美形なのだが少し変わっている。

普通娘に護身術や生き残る術はなかなか教えないだろう。

「でもまさか役に立つ時がくるなんて・・ね」

心の中で父に感謝しながら周りを見渡す。

・・・何か気配が近づいて来ているのは気のせいだろうか
バサバサと音を立てて鳥が飛び立つ音が聞こえる。

動物が派手に音を立てながら遠ざかって行くような気もする。

・・・何が近づいてきているんだろう
・・・早々に私の命の危機がこないことを願う。

森の中で出来ました

だんだんと気配が近づいて来て
ガサリ と田の前の茂みが揺れた。

・・・あの・・人です・・よね。熊っぽいってちょっとと思いました
けど。

うん・・何かその人の周りに変な威圧感漂つてるけど・・。
身長でかいですね。私も父に似て高身長で男に間違われるのですけ
ど、私よりでかくて
2メートルぐらいありますよね。

いやいやいや 人は見た目じゃなくて中身! そうですね、お父さ
ん!

それに顔が異常に怖いだけであつて顔は整わってますし、赤い燃え
る様な髪に氷の様な冷たい水色の
瞳がとても綺麗だ・・。

ぼうっと少しの間その人に見とれる。よく見るとそんなに怖くも無
いんじゃないかな。

「おい 大丈夫か?」

その人が近寄つてきながら私に問い合わせる。

「はい・・」

座つたまま答える。

「・・・お前は俺が怖くないのか?」

その人は表情こそ無表情でいるのだが驚きを混ぜた声で聞いてくる
別に慣れれば全然怖く感じないのだ。

「はい・・・あの、助けていただけますか?」

そう これが一番大事だ。この人が助けてくれないと次は何時人が
来るかわからないのだから。
でもこの人悪い人だつたらどうしよう。。そんな事はないと思う
のだけど・・・。

もしそうだったら全力で逃げよ。今はこの森から出してもらいた
い。

「その為にきた・・・」の森を出る。歩けるか?」

「はい・・・痛つ・・・」

立ち上がる足首が痛んだ。どうやら軽く捻挫していたようだ。

「・・・無理そうだな。おぶるつか?」

彼からの提案に一瞬思考が止まる。

・・・いや~その~私男性に接触する事なんて無かつたもので~
恥ずかしいじゃないですか~。あははは~

といふくだらない事を考えた。

「ほら、乗れ」

そう言いながら背中を差し出してくれている。・・いい人だ。

・・これ以上待たせるのもアレだし。ここは御好意に甘えて・・・。
むしろ私の事男性だと思ってるんじゃないですか?うん、そうに違
いない。

今の格好も男装といつても差支えない格好だし。

「で・・では御好意に甘えさせていただきます」

「ああ、どうだ?」

彼の背中におぶさる。

正直言つて恥ずかしい。幼い頃父にしてもらつた事はあるものの恥
ずかしい。

いい大人が知らない人に対してもらうのは恥ずかしい。

「お・・重かつたら降りますので言つて下さー」

「いや、重くない軽いぐらいだ」

「そ・・そつですか」

「ああ」

そんなやつとりがあつた後彼が言つ。

「Uの森を出たら俺の家があるから一先ず来るといい。傷の手当も
しよつ」

き・・傷の手当までしてくれるなんて・・。い・・良い人だ。
見た目とのギャップがあるけど・・。ハツ!これが友人の言つてい

たギャップ萌え！？

「本当にあります。」迷惑おかげしてすみません」

「いや、見たところ何か事情があるようだが悪い人物には見えないからな。助けるのは当たり前だ」

「ほ・・・本当に・・・いい人だ――――――――！」

「ありがとうございます・・・篠田 優季 と言います」

「シノミヤ・ゴーキ？珍しい名前だな。シノミヤが名前か？」

「えーと・・・」やはりでは名前が前いくるのかな

「いえ・・・私の故郷では名前が後ろいくるので・・・」やはりでは違つのですね」

「ああ・・・と言う事はゴーキ・シノミヤか？良い名前だな」

「ありがとうございます。貴方のお名前は？」

「グレン・マイサスだ。」

「マイサスさん・・・とお呼びしたらいいですか？」

「グレンでいい。俺もゴーキと呼んでいいか？」

「はーーもちろんです。」

「そりが・・もうすぐ俺の家だ」

グレンさんとの会話をしながらもグレンさんは結構なスピードで森をグングン歩いていく。

速いなあー。でも、これでも抑えてるんだろうな。

そうして森を抜けるとすぐ傍にはでかい屋敷があつた。

「ああ着いたぞ。はやく傷の手当をしなければな

「さあ着いたぞ。はやく傷の手当をしなければな
そう言いながらこれまたなかなか見ることの無いような大きな門を片手で開ける。
普通の人ではなかなか開けれませんよ？」

屋敷の中へと入れてもうと中も広い！なんか高そうな調度品が飾つてある！

「俺は一人暮らしでな。使用人も居ないんだ」

グレンさんが私を運びながらいう。
多分グレンさんの部屋へと運ばれているのだろう。
・・・うわー・・何か恥ずかしつ。男の人の部屋なんて入った事ないよー。

「俺の部屋だ。ここに椅子に座つてろ」

ガチャリとグレンさんが部屋のドアを開け見た目からは想像できないほど丁寧な動作で椅子に

座らせてくれた。

にしても・・グレンさんの部屋殺風景だ・・

グレンさんは棚から救急セットだと思われる物を取り出した。

「ほひ、足を出してくれ

そいつはわれてズボンの裾をまくる。

「染めるかもしけんが我慢しる」

・・・おおひ。今私の前にはグレンさんが跪いて手洗い台をひります。

くつ・・・は・・恥ずかしい・薬もちょっと染める・・・。

薬を塗り終えたグレンさんは一瞬で包帯を私の足首に巻いてこぐ。

「終わつたぞ」

「あつがとうござまわ

・・えへと、これからどうしたらいいんだろ?

「・・・服の下に座我は?

・・・服は脱げませんよ?これでも女ですか?・・・
ああ、やっぱり男に間違っていたんですね・・・

「すみません・・実は・・あの」

「なんだ? 怪我をしてるのか? なり早へ脱いでくれ」

無理です無理です

「違うんです! …わたし…女です!」

そう言つた瞬間時が止まつた気がした。
グレンさんの無表情が驚きの表情へとかわる。
やつして一気に顔が真つ赤になつた。

「そ・・そそそそうか。す、すまない!」

「いえ・・いつも間違われるんです」

本当に何時も間違われるんです。女の子に告白された事もあるけど
に・・・。

「やうなのか・・」

「ええ

それから暫しの沈黙の後、私のこれからについてグレンさんと話し合つ事になつた。

「これから私はビリシナム。

それをグレンさんと話しあつていた。

「ユーキは何故あそこへいたのか分らないのか？」

何故あそこにいたのかと私の前に座つてこるグレンさんは私に聞いてきた

何故いたのかわからぬ。

でもきっと故郷からは遠く離れていると思つ。

帰り道も分らないし、知り合いもいない。

「私は何処にも行くところがないのです」

そう言つてじつとグレンさんの言葉を待つた。
可能なら此処においていただきたいが、それは余りにも迷惑をかけすぎるだろう。

でも、この世界には私は行くところが無いのだ。

「そつか・・では此処に住んだらどうだ?」

「・・・いいんですか?」

思いがけないグレンさんの提案に聞思わず聞き返す。

「俺が拾つたのだから最後まで面倒をみよつ

・・・・なんて良い人だ

「ありがとうございます・・・では私を使用人として雇っていただけませんか?」

「そんな事しなくても生活に苦労はさせんぞ?」

「いいえ、働かせて下さい。命を助けていただいた御恩、私はどう返すべきか迷つてるのでですが
せめて今できる事で御恩をお返ししていきたいのです。それに何
もせずに此処にいる事は出来ません
だいたいの仕事は出来るので何でも申し付けて下さい。どうか働
かして下さい。」

そ言つてグレンさんへと頭を下げる。

「頭を上げてくれ・・正直助かるが・・良いのか?」

頭を上げてグレンさんの顔を真つ直ぐ見て返事をする。

「はい、お願ひします」

「では・・・これからよろしく頼むよ。ユーリ」

「よろしくお願ひします。グレンさん」

こうして私はグレンさんの使用人としてグレンさんの家で生活していく事が決まった。

使用者としての第一歩

「部屋は好きな部屋を使ってくれ」

私は何処に住めばいいのかと聞くとグレンさんはそう答えてくれた。
この家はどこもかしこも広いので部屋も広いのだろう。
正直言つて気が引ける。狭くて小さい部屋で十分だ。

「はい。あの・・使用者の制服とかありますか?」

「ああ、それならあるにはあるが・・・」

どんなのだろう?定番はメイドさんだよね。でも私は男性用が良い
や。動きやすそうだし。

男として振舞つた方が何かと有利だし。男に間違えられるし・・・

「男性用しかないんだが・・・」

「あ、そなんですか?それは好都合です。全然構いませんよ。
むしろ男性用がよかつたので」

「せうか・・では後で持つてくるから着てみてくれ」

「はい。ありがとうございます」

よしつ!これから使用者としてバリバリ働くぞ!
少しでも恩を返さねばつ!

と心の中で意気込んでみる。

「あ・・それから私は男として雇ってください」

「ん? 何でだ?」

グレンさんは首を傾げながら聞いてくる。

仕草可愛つ。萌え!

(優秀だからそう見えるのであって他の者が見たら卒倒ものである)

「男として働いた方が都合が良いのです。それに男にしか見えませんから」

「そうか・・・わかった

「よろしくお願ひします・・・あ

「ん?」

「グレンさんを何とお呼びしたら良いのでしょうか? 雇い主をさん付けは・・・」

うーん・・・ご主人様? グレン様? 主様?
何て呼べばいいのだろう?

「気にしないでくれ。さん付けの方が良い・・・堅苦しいのは苦手だ

「そうですか? ではグレンさん・・・とお呼びします。でも他の方がいらっしゃる場合は
グレン様と呼ばせていただきたいです

一応最低限度のけじめだ。

「気にしないが・・そうすると決めたならやつすると良い」

「はい。グレンさん」

これからのお仕事はどうなるかは分からぬけど
頑張つていこうと思ひます。

お父さんお母さん私は良い人に拾われました。
どうぞそちらから私を応援していく下さい。

使用人の生活

使用人としてグレンさんに雇つてもらえる事になつてから早数日がたちました。

なかなか充実した日々を送つております。

朝は早く起きて庭の掃除と整備。今まで使用人さんが居なかつたせいで草は伸び放題でしたし
お世辞にも綺麗とは言い難い庭だつたので頑張つて綺麗な庭にする
計画を立てつつ、まずは草抜きが
最近の朝の日課になりました。

それから朝食の準備へと取り掛かります。

グレンさんは何でも食べてくださるので作りがいがあります。
朝食は同じテーブルで私も頂きます。グレンさんの提案でこうなりました。

無表情で食事を口に運ぶ姿はながら小動物のよう（他から見たら
獰猛な肉食動物の食事

表情が読み取りにくいですけどデザートを食べている時は少し嬉しそうに見えるので

甘党なのでしょうか？これからは甘味にも力をいれてみます。

ギャップ萌えです！ああ 萌える！
胸にキュンとくる！素敵！素敵です！

ゴホン・・・失礼しました。

ええと、それからグレンさんはお仕事へとお出かけに。
騎士団長をされてるやつです。

昼の間は私は屋敷のお掃除をします。
何と言いますか・・・いつ・・・もの凄い感じになつてた部屋があつ
たので・・・。

どれだけ掃除してなかつたんですか！？って感じでした。
埃の舞う部屋の中を綺麗にすべく掃除セットを持ち込み掃除してま
す。

まだまだ掃除すべき部屋は残つていますが・・・

掃除が一段落したら夕食の買出しですね。

グレンさんに教えて頂いた市場への道を通りて市場へと。
夕食の食材を買って屋敷へと帰ります。

グレンさんが帰つてこられたら朝と同じく同じテーブルで食事。
その日あつた事を報告します。グレンさんもその日あつた事を話し
てくれて楽しいです。

無表情ですが何となく表情が理解出来るようになりました！
微妙な変化ですけど・・・

いひじて一日が終わつていきます。

ああ充実してゐ一日ー

騎士団旗の今日の様（複数枚）

短いですが・・・

騎士団長の今日この頃

今はきっと今まで生きてきて一番幸せな時だろ？。

それがここ数日のグレンの心の中である。

自分の家の裏の森（入ったら並みの人間では出て来られない）で出会った人物が彼の幸せの源なのである。

初めて会った時から自分を怖がらなかつた彼女に彼が好意を抱くのもまあ当然と言えば当然だろう。話しているだけでこの上なく安らぎ幸せなのである。彼女の全てに惹かれているのだ。

今日もユーリの朝食は美味しかつた。
目をそらさずにいてくれた。
家の仕事もそこまでしなくていいのに。
俺を怖がらずにいてくれる。
笑顔で俺といってくれる。

全部が初めてで全部が嬉しい。

そんな幸せ一杯のグレンは今日も一人ぼつんと自分の仕事をこなしていた。

そして超^ご機嫌なのだが他の人からみれば何時も以上の威圧感のあ

るオーラが発せられていた。

こつしてグレンは仕事が終わるとさつと家に帰るのだ。

今日の夕食は何だらうな

軽い足取りで彼女が待っているだらう家へと帰る。

朝の出来事

ブチリ ブチリ ブチリ ブチリ ブチリ ブチツ

今私は無心で朝の習慣となつた草抜きに励んでいる。
清々しい朝の空氣の中、綺麗な庭へと近づけるべく草を抜く。

ブチリ ブチリ ブチツ ブチリ ・・・・

・・・・なかなか終わらない。

・・・・だいたいこの庭は広すぎる。

「ふう・・・今日はこの辺で終わりますか

取りあえず全体的に三分の一程しか終わっていないがきりの良い所
で終わらせ朝食の準備へうつる。
今日は・・・何にしようかな?

献立を考えながら調理場へと向かう。

最初は使い慣れていなかつたけど今は使いこなす事が出来る。

朝食が出来上がつたらグレンさんを起こしに行く。
この屋敷は広いので起こしに行くのにもそれなりに歩かなくてはならない。

本当に無駄に広いのだから・・・

朝食が冷めてしまわないように早足でグレンさんの部屋へと向かう。

長い廊下を進む。進む。進む。進む。進む。まだつかないのか！？

朝食冷めるーと思しながらわざわざ早足で進み、やつとグレンさんの部屋へと着いた。

・・・・・遠かつた。

あつちでの家は普通に家族三人で暮らすのに丁度いい家だったからなあ・・・。

逆に此処は一人しか住んでないのに広すぎる。
無駄です。広すぎ。移動に疲れる家って・・・。

氣を取り直してグレンさんの部屋のドアを叩く。

「グレンさん。朝ですよ、起きてくれて」と

シーナー

「グレンさん？寝てるんですか？」

反応なし。

「入りますよ～？良いんですね？」

グレンさんの部屋のドアは用事があつたらいつでも入つていふの
事で
鍵を開けてもらつている。

いつも起きてしとへるのは一回田だ。昨日は残業があつてお疲れの

様だったから

きっとグッスリ眠つてゐるに違ひない。

本当はまだ出勤まで時間には余裕があるので寝かしてあげたいのだが、以前起こしにきて

気持ちよさそうに寝てたので起こさず一人で朝食を食べて、仕事をしていて時間がきたので

起りて行かうと思ったらグレンさんは既に起きていて

「朝食……食べたのか？」

何か凄い顔でそう聞かれた。

「はい。グレンさんの朝食は別に用意してますよ」

そう返したら、

「そう・・・か」

あれ――――！？幻想ですか？何か・・・何か・・・・・・・

何かプルプルしてる！え？悲しかつたんですか？！寂しかつたんですか？！

でも顔がちょっと反対に凄く怖くなつてきてしまよ！

いや！ ちょっと！ 地響きがしそうな程のオーラだしてるんですけど！ ？
こ・・これは謝つた方が良いのか！ ？ そうなのか？ どうする！ ？ わ
たしつ！ ？

・・・めし一謝るぞハ一・・・」してもグレンせん無言で凝視して
きてる。

見てる 見てる 見てる 見てる 見てる 何時まで見てる
んです !?

あ・・何か悲しそうな顔してる。
捨てられて子犬かよ！そんな顔で
私を見ないで下さい！

謝る。謝るんだ。

「グレンさん・・・じめんなさい。でも・・・グレンさんお疲れの様でしたから寝ていて欲しくて・・・

氣を悪くされたのでしたら謝ります。すみません・・・」

そう言いながらグレンさんを見つめる。

「ん。でも・・・・朝食は一緒に食べたい。」

少し頬を染めながら（優季だから分かるのであって他人には判別不可能）

グレンさんは咳いた。

・・・・・ どんだけ私をときめかせたら気がすむんですか？

あ——もう!! ケレンさん好きだ——!!

グレンさんは私の嫁！！

「せうですね・・私もグレンさんと一緒に食べたいです。今度からはできるだけ起こしますね」

「やつしてほしー」

柔らかく微笑んで（一いちも優季だから以下略）やつてほしー下さいました。

こんな事があつてから必ず一人で朝食をとるよつじました。グレンさんも朝食の時間に起きてない事はなくなりました。ところが事は昨日は随分お疲れだったんですね。

やつぱり寝ててほしーのですか？すると後で不機嫌になると困ります。

ガチャリとドアを開けてグレンさんの部屋へと入る。

グレンさんが現れた。優季は200のダメージをつけた。（前書き）

優季がちょっと陥っこので

そんな優季が苦手な方は「注意下さい。」

グレンさんが現れた。優季は200のダメージをつけた。

「グレンさん。朝ですよー。朝食の時間ですよー」

グレンさんの部屋へと入つてまずは声をかける。

反応なし。

反応がなかつたのでグレンさんの寝ているベットへと近づいてみる。

ああ・・。爆睡中です。

気持ちよさそうに寝ています。

グレンさんの威圧感も寝ている時は普段の二割減ですね。

あーーー、寝顔可愛い。何時もとはまた違つた良さがある。

何時もは眉間によつてるしわが無いとか。

ちよつと開いてる口とか。

いつもより少しだけ無防備なところとか。（他人からしたら十分な程威圧感はあるのだが・・・・・）

うふ、うふふふふふふ・・・・・・

・・・私まるで変質者のようではないですか。涎なんて出でませんよー

いかん、いかん。じつくり寝顔鑑賞だなんて・・・・・したいけど今は起こすのが先決ですね。

「グレンさん。起きてくださいーー」

結構近くで声をかけてみる。

少し動いたけど起きる気配はない。
本当にお疲れのようだ。

でもここは心を鬼にして起きることを続行する。

起こして欲しいと言ったのはグレンさんですかりね。文句言わない
でくださいね。

「グレンセーん。朝食冷めますから、起きてやれー」

今度は揺すってみる。

「んう・・・ん?・・・ゴーキ?・・・朝食?」

うつすら目を開けながら反応してくれた。

ゲホッ・・・・グレンさんの反応が可愛すぎて辛い・・・。
(ゴーキは理性に100のダメージをつけた。残りポイントはあと
僅かだ。踏ん張れ。踏ん張るんだ!)

「やつですよ。朝食です。起きれないほつが良かつたですか?」

そう問うと

「いや・・・起きてくれて・・・嬉しい」

(優季のみにわかる)笑みで返事がかえってきた。

ガハッ・・・・

(せりに)ダメージをつけた。理性が切れる前に撤退。撤退だ!)

選択肢は 撤退。」襲う の一択だ!

撤退を連打する。早く動くんだ私!

「では・・・着替えて来てくださいね」

ドアに近寄つつつグレンさんにそいつぱつしそそかにドアを開ける。

「わかった・・・起いくてくれてありがとう」

(優季にのみ以下略)でダメ押しの微笑つきである。

「い・・・いえ、いえ! では、待つてますので!」

私は急いでグレンさんの部屋から出た。

もう私の残りポイントゲージは赤だ・・・ギリギリセーフ・・・セーフ・・セーフ?

このままいくと変質者(グレンさん限定でね)になりそうな自分が怖い・・・

・・・まあ気を取り直してグレンさんと朝食だ。
はやくダメージを回復したい・・・。

彌因岐の釋迦。(繪畫也)

短い小説です。

副団長の報告。

どつも 初めまして
騎士団副団長のヒューイ・ゼイセンです
え? テンションがウザイって? 初登場ではしゃいでんだよ

今田は俺の上司であり友人のグレンが最近変な事について語りつい
おもうよ

変な点

そのいち

何かオーラが怖い。マジ怖い。以前の五割まし。
そのオーラのせいで隊員の大半が被害にあつた。気絶した。
かく言つ俺も初めてそのオーラを感じた時は気絶しそうになつた。
マジやばい。
あれはもう兵器の域だ。

(本当はグレンから発せられる幸せオーラなのだが他者からすると
負のオーラ、邪悪な威圧感に
感じるらしい)

そこに

やけに早く家に帰る。

以前は夜遅くまで仕事していたのにさつと帰る。

彼女でも出来たのかと思ったがアレに惚れる女はいないと思つ。

一目見て泣いて逃げらるのでグレンの傍には女がいた事がない。むしろ人がいた事がない。

(只今絶賛同居中　夫婦かと思われるような雰囲気です)

そのさん

たまにグレンの仕事部屋にいくとボーッと窓の外を見てる事がある。グレンが外を見ていると見ていて先にいた鳥がボトリ・・と氣を失つて落ちていくを見た。

どうやら動物にもあのオーラは有効のようだ。

(その後それをみたグレンさんは悲しくなり、ユーキが落ち込んだグレンさんを慰めた)

以上、報告終了。

変になつた理由を知りたいものの近づくと氣絶すると思つので遠くから見守る方向で

今後も報告していきたいと思います

朝食での疑問

「どうですか？お味は？」

只今グレンちゃんと一緒に朝食中です。

「つまー・・・」

何時も通りの嬉しそうな顔（他からみたら無表情）で答えてくれました。

嬉しいです。作りがいがあると喜びものですよ。

「せうですか・・・でも、もっと美味しく作れるように頑張りますね」

向上心は大切ですね

グレンさんの健康の為にも美味しく栄養バランスの良い物をつくりねば。

「今でも十分うまい」

「ふふ・・ありがと」「ありがとうございます」

一人でほのぼのとした空氣の中朝食を食べる。

とにかく最近気になっていたことがあったのでグレンちゃんと聞いてみる事にした。

「グレンさん・・・職場でもきちんと食事食べてますよね？」

私が使用人になる前のグレンさんの生活を聞いて心配だつたのだ。
もしかしたらろくな食事をとっていないのではと。

そう聞いたらピタリとグレンさんの動きが止まつた。

「・・・グレンさん？ 食べてないんですか？」

グレンさんは見つめながら聞いてみると目が泳いでいる。

「・・・食べてなかつたんですね。

「ひひひ・・・不覚です。もつと早くに聞いていれば良かつた・・・。

「食べてなかつたんですね。・・・そりですか」

「いや・・・その・・・それは・・・」

グレンさんは拳動不審だ。

ふ・・・ふふふふふふふふ

「グレンさん・・・きちんと食べてくださいなかつたなんて・・・

「ふふ」

「す・・・すまない」

少しばかり黒いオーラをとばしてくる優季に冷や汗を流しながら謝る。

「なら・・・私が昼食を作つてグレンさんの職場まで届けましょうか

？」

一度でいいからグレンさんの仕事してる姿みてみたいんですね。・
・
どんな感じなんでしょうかへへあへでも迷惑かな?でも見てみたいへ!
・

「それは。。嬉しいけど、大変じゃないか?」

嬉しいへへと言つた事は仕事場へ行つてもOKって事ですねへ?
ふつ・・・もうと決まれば

「ふふふ・・・何をおっしゃこますかー主の健康を管理するのも使
用人の仕事ですよー」

と意気込みながらいつてみる。

「わうか・・・じゃあ頼もうか」

よしつー!許可いただきましたつー

「ええ・・お任せ下れー必死や美味しい栄養バランスのとれた昼
食をお届けしますー」

頑張るぞー!美味しい昼食を作つてみせるー

べ・・別に仕事している姿みて萌えたいとか一緒にいる時間を増
やしたい何て下心は
ありませんからねつー本当ですよー

「ありがとう・・・ゴーキ」

微笑みながら言つてくださいました。

ああ、その笑顔だけで一生グレンさんに美味しい食事を作ったとしてもお釣りがきます！

「では早速今日のお皿につかがいますね」

「ああ、わかつた話はしておく」

「はい、では楽しみにしていてくださいね」

よし一次回はグレンさんの職場へ訪問です

朝食での疑問（後書き）

短いですね・・・

職場訪問 城への道のり

「でー もー たー ー ー ー」

できました 優季特製サンドイッチ 愛情たっぷりです？

「ふ・・・まあ早くグレンさんの所へと行かねばっ！」

出来上がったグレンさんの昼食をバスケットへと一先ず入れておき
着替える為に
自分の部屋へと急ぐ。

汚い格好をしてグレンさんに恥をかかせる訳にはいきませんからー！

最近はこの屋敷の広さにも慣れてきたのでそれほど疲労感を感じる
事もなく着いた
自分の部屋のドアを開けて入る。

私の部屋は狭くもないが広くもないという丁度いい大きさの部屋だ。
家具はグレンさんが私のために新しく用意してくれたらしく。

本当にいくら恩を返しても返しきれないぐらいお世話になっている。

「さて・・・ヒ、じゃあ使用人用の外出用コートを着て行きますか」

クローゼットの中を見て決める。

このクローゼットも新しく買つて下せつたらしこ（グレンさんは何
も言わなが）

綺麗な木目の木で出来たこはきっと高いのだろうなあ。
うつ・・・・・グレンさんはお金もきちんと返さないと。

一応汚れていてはいけないので使用人服も洗濯した新しい物に着替えておく。

この屋敷の使用人服は白と黒でまとめられていて中々センスの良いものだ。

白いシャツのボタンを外して脱ぎ新しい物へと着替える。因みに胸は女だとバレないよう一応さらしで巻いている。まあ・・・こんな事しなくてもバレないよ・・私の経験がそう言っている。

ズボンも一応新しい物に変える。

着替え終わつたところで脱いだ服をハンガーにかけてクローゼットの中にしまう。

後で洗濯場へ持つていこう。

最後に「コードを羽織つて

「よしー着替え完了ー!グレンさんの元へ行こうー!」

急いで部屋から出て調理場へと行きバスケットを片手に

「こぞー!グレンさんの職場へー!」

意気込みをいれつつ玄関へとむかい外へと出る。

ギィイイと音をたてながら門を開ける。

やつぱりこの門は重いと思う。グレンさんも普通の人は開けられないと言つていた・・・。

え?私は普通じやないのかつて?もうそれは父のせこと言つことで・。

「の屋敷はグレンさんの職場のお城からは離れているものの多分毎までにはつけるだらう。

この周辺は森や草原の多いのだが城下町は色々な店が出揃い大いに賑わっている。

そ、早く行きますか。

バスケットの中身の事を考慮しやや早足で歩くことじめる。
うへんやつぱりお城はちょっと遠いよねえ。

三十分ぐらいで着くかな？

もくもくと城へと続く道を歩いていく。

あまり外には出ないので周りの景色を楽しんでみる。

空青い・・・あ、鳥飛んでるなあ。

早くグレンさんに会いたいなあ・・・。

・・・景色を楽しむと決めた三秒後にはグレンさんに会いたいと思つた私は重症ですか？

そんな事を考えながら歩いていき城下町へと着いた。

「おや、じさんちわー！今日は良い果物がはいつてるよー。」

城へと続く道を歩いている途中私に声をかけてきたのは何時も私が野菜や果物を買っている

店の奥さんであった。セリアナさんと言つ女性だ。

少しふつくりとした40歳ぐらいの女性で暖かい雰囲気をかもしだしている。

お母さんって普通はこんな感じかな？

私のお母さんはちょっとアレだったけど……。

「 わうなんですか。でも今からグレンさんの所へ行かなければなら
ないので・・・」

野菜や果物はいつも美味しい物をおこしてさりてるのでそれ以上
となると本当に美味しい
のだろうな・・・。でも残念だけば今回は諦めるかな・・・。
グレンさんに食べてもらいたかったなあ・・・。

「 なんだそうだつたのかい。じゃあおことこであげるから後で買
いきなさいな」

「え？ いいんですか？」

「 こつも蠟僕にしてもらひてるし、田那もゴーキの事氣に入つてる
しね」

「 つ～じゅあお願いします、あつがとつぱれこまわ」

「 いいんだよ。家族さんってゴーキの事は『氣』に入つてるからね」

「 ははは。嬉しいです。では、もうこかなくては」

「 わうだね、じゃあ後でみつとくれ。グレンさんこみじくへな

「 はい、また」

おおーやつたあー良い食材ゲット！

あ、セリアナさんとその「家族との馴れ初めはまた後日。

今日の夕食に美味しい食材を使える事に「機嫌で城への道を進む。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6263v/>

強面騎士団長と異世界人

2011年11月13日07時02分発行